

学校编码: 10384

分类号_____密级_____

学号: 200404079

UDC_____

厦 門 大 学

硕 士 学 位 论 文

中日親族語彙の比較研究

——文化言語学の立場から

中日亲属词汇对比研究

——从文化语言学的视角出发

熊 娟

指导教师姓名: 林娟娟 教授

专 业 名 称: 日语语言文学

论文提交日期: 2007 年 4 月

论文答辩时间: 2007 年 月

学位授予日期: 2007 年 月

答辩委员会主席: _____

评 阅 人: _____

200 年 月

厦门大学学位论文原创性声明

兹呈交的学位论文，是本人在导师指导下独立完成的研究成果。本人在论文写作中参考的其他个人或集体的研究成果，均在文中以明确方式表明。本人依法享有和承担由此论文而产生的权利和责任。

声明人（签名）：

年 月 日

厦门大学学位论文著作权使用声明

本人完全了解厦门大学有关保留、使用学位论文的规定。厦门大学有权保留并向国家主管部门或其指定机构送交论文的纸质版和电子版，有权将学位论文用于非赢利目的的少量复制并允许论文进入学校图书馆被查阅，有权将学位论文的内容编入有关数据库进行检索，有权将学位论文的标题和摘要汇编出版。保密的学位论文在解密后适用本规定。

本学位论文属于

1、保密（☐），在 年解密后适用本授权书。

2、不保密（☐）

（请在以上相应括号内打“√”）

作者签名：

日期： 年 月 日

导师签名：

日期： 年 月 日

厦门大学博硕士论文摘要库

レジュメ

親族語彙に関する研究は、中国と日本の民俗学者、人類学者および言語学者たちの関心を集めるようになって久しい。しかし、中国語と日本語の親族語彙に関する比較研究は量が少ないのみならず、以下のような欠陥もあると思われる。まず、語彙の数量、意味範囲の相違など、言語レベルの比較にとどまっているものが多く、言語の背後に潜んでいる社会文化の要素とのつながりがあまり重視されてこなかった。次は、データの分析による量的な比較研究がほとんど見られない。それから、性質の異なった親族名称と親族呼称を混同して研究がなされてきたという問題もある。

本稿は文化言語学の立場から、資料の収集および社会調査の方法を用いて、中国語と日本語の親族語彙を親族名称と親族呼称に分けて比較し、中日親族語彙は名称体系としてそれぞれどのような構造を持っているか、呼称としてそれぞれどのような原則に沿って使われているかということを明らかにする。その上で、中国語と日本語の親族語彙のシステム及び使用面の差異が中日両国の家族制度、家庭観念および集団構成の仕方の相違など、社会・文化の要素とどのようなかかわりがあるのか、ということを探り明らかにすることを趣旨としている。

本稿は次のような手順に沿って、結論へと導く。

第一章において、先行研究を紹介し、今までの研究の不足を指摘した上で、本研究の目的と意義、立場と方法を明示する。

第二章では、親族名称をいくつかの子システムに分けて表にまとめて比較しながら、中国語と日本語の親族名称の構造上の異同点を解明する。中国語の親族名称は血族を宗親と外親に分けて違う名称を付ける上に、序列を重視するという特徴を持っているのに対して、日本語の親族名称は傍系の親族が大まかに分節されているし、父方・母方も区別しないことが分かる。さらに、このような差異に潜んでいる中日両国の家族制度、家庭観念の違いを探ってみることにする。

第三章において、親族呼称の自称、対称と他称の使用の実態を調査結果に基づいて見ることによって、中国語と日本語の親族呼称の使用の原則の相違について検討する。その上で中国語の親族呼称の擬制の使い方と日本語の相手中心や子ども中心の現象を、倫理観や集団構成の仕方の違いから分析を試みる。

第四章では、中国の集団は血縁集団であり、集団の中の自分と他の人は対立しながら集団を構成するのに対して、日本の集団は現実の需要によるもので、集団の一員である自分は常に他人と同化しながら集団を形成していくという結論が導かれる。

キーワード： 親族名称；親族呼称；家族制度；家庭観念；集団構成の仕方

内容摘要

亲属词汇的研究历来受到中日两国民俗学家、人类学家和语言学家的重视，但是，中文和日语亲属词汇的对比研究不仅数量较少，而且存在以下缺陷。首先，这些研究大多停留在词汇的数量、词汇意义等语言层面的比较，而对潜藏在语言背后的社会文化因素未能深入探讨。其次，少有通过具体数据进行定量的比较研究，并且还存在把亲属词汇中性质迥异的亲属名称和亲属称呼相混淆的问题。

本文站在文化语言学的立场上，运用收集资料和社会调查的方法，把亲属词汇按性质分为亲属名称和亲属称呼两大类进行中日对比分析，旨在阐明中文和日语的亲属词汇作为名称体系各自拥有怎样的构造，作为称呼又分别按怎样的原则被使用。在此基础上，对中日文亲属词汇在其系统以及使用上的差异与中日两国的家庭制度、家庭观念、集团构成方式等社会·文化因素之间的联系进行逐次剖析。

本论文按照以下顺序进行分析并推导出结论。

第一章介绍前人的研究成果，指出当前研究所存在的缺陷，在此基础上明确研究的目的、意义和方法。

在第二章里，把亲属名称分成若干个子系统，以表格的形式进行中日对比，阐明中文和日语的亲属名称系统在结构上的异同点，从而得知中文亲属名称的最大特征是重视血缘关系，把亲属分成宗亲和外亲，分别用不同的词来表示，而且十分重视辈分；而日语对旁系亲属不进行细致区分，不区分宗亲与外亲。在此基础上进一步从中日两国的家庭制度、家庭观念之迥异来探讨产生上述差异的原因。

第三章根据调查结果，从自称、对称、他称三个方面对亲属称呼的使用现状进行描述，指出中日两国亲属称呼在使用时的不同原则，并从伦理观和集团构成方式的差异对中文亲属称呼的虚拟用法和日语以听话人或家庭中最年幼者为基准的用法进行阐释。

第四章通过分析得出下述结论：中国的集团是以血缘关系为纽带的集团，集

团中“我”与他人总是作为对立的存在出现；而日本的集团是根据现实需要所组成，在集团内部“我”总是以与他人同化的方式存在。

关键词：亲属名称；亲属称呼；家庭制度；家庭观念；集团构成方式

目 次

第一章 序論.....	1
1.1 問題の提起.....	1
1.2 先行研究.....	1
1.2.1 親族語彙の研究の歴史.....	1
1.2.2 日本における親族語彙の研究.....	3
1.2.3 中国における親族語彙の研究.....	5
1.2.4 中日親族語彙の比較研究.....	6
1.3 本論文に関して.....	7
1.3.1 研究の対象.....	7
1.3.2 研究の立場と方法.....	10
1.3.3 研究の目的と価値.....	11
第二章 中日親族名称システムの比較.....	13
2.1 中日親族名称システムの概観.....	13
2.1.1 直系親族の名称.....	14
2.1.2 兄弟姉妹とその配偶者・子孫の名称.....	17
2.1.3 両親の兄弟姉妹とその配偶者・子孫の名称.....	21
2.1.4 祖父母の兄弟姉妹とその配偶者・子孫の名称.....	25
2.1.5 配偶者とその血族の名称.....	28
2.2 中日親族名称システムの異同と社会・文化の要素.....	31
2.2.1 男尊女卑の倫理観.....	32
2.2.2 家族制度の要素.....	33
2.2.3 「家」に関する観念.....	34

第三章 中日親族呼称の使用の比較.....	37
3.1 呼称用語の体系と親族呼称.....	37
3.2 中日親族呼称の使用の実態.....	38
3.2.1 対称の用法.....	38
3.2.2 自称の用法.....	45
3.2.3 他称の用法.....	48
3.2.4 親族呼称の転用.....	50
3.3 中日親族呼称の使用の異同と社会・文化の要素.....	52
3.3.1 長幼序有りの倫理観.....	52
3.3.2 内外別有りの倫理観.....	53
3.3.3 集団における「己」と「他」の関係.....	54
第四章 結論.....	56
参考文献.....	59
付録.....	61
謝辞.....	76

目 录

第一章 绪论.....	1
1.1 提出问题.....	1
1.2 前人研究.....	1
1.2.1 亲属词汇研究历史.....	1
1.2.2 日本亲属词汇研究.....	3
1.2.3 中国亲属词汇研究.....	5
1.2.4 中日亲属词汇对比研究.....	6
1.3 关于本论文.....	7
1.3.1 研究对象.....	7
1.3.2 研究立场与方法.....	10
1.3.3 研究目的与价值.....	11
第二章 中日亲属名称系统对比.....	13
2.1 中日亲属名称系统概观.....	13
2.1.1 直系亲属名称.....	14
2.1.2 兄弟姐妹及其配偶・子孙的名称.....	17
2.1.3 父母兄弟姐妹及其配偶・子孙的名称.....	21
2.1.4 祖父母兄弟姐妹及其配偶・子孙的名称.....	25
2.1.5 配偶及其亲属的名称.....	28
2.2 中日亲属名称系统的异同及社会・文化因素.....	31
2.2.1 男尊女卑的伦理观.....	32
2.2.2 家庭制度的因素.....	33
2.2.3 家庭观念.....	34

第三章 中日亲属称呼使用对比.....	37
3.1 称呼语体系和亲属称呼.....	37
3.2 中日亲属称呼的使用现状.....	38
3.2.1 对称的用法.....	38
3.2.2 自称的用法.....	45
3.2.3 他称的用法.....	48
3.2.4 亲属称呼的扩展用法.....	50
3.3 中日亲属称呼使用的异同及社会・文化因素.....	52
3.3.1 长幼有序的伦理观.....	52
3.3.2 内外有别的伦理观.....	53
3.3.3 集团内“己”和“他”的关系.....	54
第四章 结论.....	56
参考文献.....	59
附录.....	61
谢辞.....	76

第一章 序論

1.1 問題の提起

言語は特定の社会の人々の生活や考え方から生まれたものであり、われわれがどのような言語を持ち、どのように言語を使用するかということは社会生活や社会構造と密接な関係を持つ。[1]

親族語彙の体系は各言語の名称体系の重要な下位体系のひとつである。この名称体系はどのようなシステムを持つのか、どのような分類の仕方がなされているのかということは社会の要請及びこの社会の成員の価値体系に応じたものと思われる。また、親族語彙の実生活における使用は一定の原則があり、その原則は組織体を編成してゆく際の、個人側の一定の言語行動上の接近のパターンなのである。そういう点で、この使用の原則が、個々の人によって異なるとはいえ、ある共通の言語文化世界において、かなり一般的共通性を示している。

従って、親族語彙に関する研究は、ある社会の家族制度、家庭観念、及びこの社会の成員の思考や行動の様式、集団編成に関するパターンを表現していて、通文化・通時代的な言語・文化比較の一つの有効な道具になりはしないかと考えられるのである。

1.2 先行研究

1.2.1 親族語彙の研究の歴史

親族語彙 (kinship term) についての研究には、従来、民族学者または社会人類学者たちが強い関心を寄せてきた。彼らは世界の幾つかの国の親族語彙体系を類型化して、更にそれと親族組織のあいだの対応関係を見出すことに重点を置いていた。最も初期に表れた研究はアメリカの人類学者のモルガン (L. H. Morgan) の『人類の血縁と姻戚の諸体系』(1871)である。彼はその著書

の中で親族名称の体系を記述的（descriptive）体系と類別的（classificationary）体系とに大別した。前者は日本や西欧に見られる体系が典型で、父、母、娘などの第一義の関係を示す名称を組み合わせることにより傍系の親族を表すようなものであり、後者は、このような記述的な用法をいっさい用いず、親族をクラスにまとめ、単一の名称をそのクラスに適用するようなことである。〔2〕モルガンの試みた名称体系の類型論は、ローウィ（R. H. Lowie）により批判的に発展させられ、マードック（G. P. Murdock）に至って一応の集成を見せた。マードックは『社会構造』（1949）の中で世界の資料を収集した上で、親族名称体系をイトコ名称に基づいて六つの類型に区分した。〔3〕

しかし、そのような立場からの親族名称の研究は、原忠彦などが『仲間』（1979）の中で「親族名称は、親族組織とある程度の対応を示すものの、決してそれは一対一のような明確な対応ではない。」〔4〕と指摘したように、大きな問題点を持っていることが分る。たとえば、「マードック流の分類方法で日本の親族名称はエスキモー型に入るということになる。そうして、これは、マードックのいうエスキモー型の親族組織を持つ社会の特徴であるとされる。このいわゆるエスキモー型の親族組織は、基本的には、外婚単系血縁集団のない、双系的な傾向が強い、核家族中心の社会とされるが、このような諸特徴は、何も親族名称を知らなくても、社会人類学の現地調査により詳細に分かる場合が多いし、また、エスキモー型といわれる社会は日本やアメリカなどの工業化社会から、パリ島のような農業社会、アンダマン島のような採集狩猟社会といったように、生業に関しても幅広く、地域的にも中心のない分布を示していて」〔4〕、マードックの基準以外のところでは全く似ても似つかない姿をしている。そこで、「……類型化を試み、さらにそれと現実社会の対応をみるという方法で得られる情報は限りがあり、そのような方法で得られる成果は最も早く出尽くした観である。」〔4〕とリッチからも強く批判されている。

欧米ではこのような親族名称の研究の一種の行き詰まりの状態を打破しようとする動きは一九五〇年代後半に現れ始めた。ニーダム（R. Needham）やリ

ーチ (E. Reach) などは親族名称をカテゴリの視点から捉え、個別社会を詳細に研究し、その社会における独自の分類のあり方を追求すべきだと提唱する。その一方で、名称をカテゴリの視点から捉え、個別社会研究を重視する関係名称論に対し、全く対立する立場に立つのが、グットナيف (W. H. Goodenough) とラウンズベリ (F. G. Lounsbury) をはじめとする言語学者による成分分析法である。成分分析とは、「名称体系全体にわたって、各親族型に共通する成分を探し出し、いくつかの成分を組み合わせることにより各名称を定義し、その意味特徴を抽出するというものである。」[5] 親族名称の場合一般に提案されているのは性別、世代、系統（直系、傍系）などを基準とするものである。ただここで注目しなければならないのは、「成分として用いられる基準はほとんどが二〇世紀に析出したものの適用であった、それ以後は新しい、重要な分類原理が見出されることができなかった。」[4] その上に、このような成分分析による研究は言語レベルにとどまることが多いらしい。

以上見てきたように、欧米における親族語彙に関する研究は、常に二つの極端に走っていることが分かる。つまり、親族語彙の体系と親族組織などとの間の対応関係を見出そうとする視点と、名称というものは外在する社会制度などから説明されるのではなくて、第一義には言語によって決定されているという対立する立場からの研究がなされてきた。確かに、親族語彙を全く社会学的原理にそって解釈するということは、言語習慣には無視する恐れもあるが、言語が社会的な産物である以上、両者の関係を全く否定することもできないはずなのではないかと思われる。従って、両研究をどのように止揚して融合させていくのかということが、今後の研究の発展の鍵といっても過言ではない。

1.2.2 日本における親族語彙の研究

以下日本におけるこれまでの親族語彙にかかわりのある研究を整理してから、更に問題点を指摘していく。

日本では、親族語彙に関する研究には主に民俗学また人類学の立場からなされたものが多い。一番最初の研究書は柳田国男の『親族語彙』(1943) である。

この本の中で日本語の親族語彙が集められている。しかし、彼の集めた親族語彙は個々の語彙がそれぞれのシステムから切り離されていて、親族名称の体系の分析が全く不可能な形で資料が集めているのである。しかも語彙はその使われ方から全く切り離された形で与えられていた。[4] また、綾部恒雄は人類学の立場から人類の親族名称の研究の歴史や親族名称の類型と体系について紹介した。谷泰（1974）の研究も人類学の視点からであるが、体系的な分析や呼称および親族名称の使用に見られる対人関係の分析に重点が置かれている。[6（6）] これらの研究の多くは上述した欧米での研究の枠から離脱できなかったといえよう。

1960年代に入ってから、鈴木孝夫をはじめとする日本の言語学者たちもこの分野の研究に目を向けるようになった。鈴木孝夫は親族語による自称と対称の日英の比較に力を入れていた。彼は『ことばと文化』（1973）の中で、言語学の視点から、親族語彙の使われ方に注目して、文学作品を例にとり、親族語彙を自称詞と対称詞とに分けて分析した上で、その使用の原則を提出した。[7] このような新しく導入された親族語彙の研究の視角は後の日本語の呼称研究ばかりでなく、中国語の呼称研究にも大きな影響を与えたといってもよい。本文の筆者の立場はどちらかというとそれに近いものといえることができる。

しかし、鈴木氏の研究には必ずしも問題はないというわけでもない。第一に、彼が親族語彙の対称と自称の使い方を詳細に論述した一方、親族語彙のもう一つの使い方、むしろもっと重要な使い方といえる他称（言及）の用法を無視してきた。第二に、彼の提出した原則は筆者の調査したところで実情に一致していないところがある。この点に関しては、本文の第三章の中で詳細に述べることにしたいと思う。

もう一つ興味を引くことは、そういう親族語彙の研究の中で、上述した鈴木孝夫の日英比較や柴田武のトルコ語との比較および韓国語との比較が多くみられるが、日本人研究者による親族語彙についての中日比較は、筆者の調べるところでは神田千冬氏の『『紅樓夢』における親族呼称と身分呼称についての研究』（1987）を除いて、ほとんどないようである。

Degree papers are in the "[Xiamen University Electronic Theses and Dissertations Database](#)". Full texts are available in the following ways:

1. If your library is a CALIS member libraries, please log on <http://etd.calis.edu.cn/> and submit requests online, or consult the interlibrary loan department in your library.
2. For users of non-CALIS member libraries, please mail to etd@xmu.edu.cn for delivery details.

厦门大学博硕士论文摘要库